

鴻 koh

月刊俳句誌

令和2年4月1日発行

(毎月1回1日発行)

第15巻第4号 通巻166号

4 月号

2020



鰐口を二度やはらかに打つて冬

大寺の仏に御慶申しけり

仏百体ひとかたまりの冬日向

紙懐炉抱き涅槃会の寺にゐる

塩地藏こつんこつんと春がくる

穴稻荷料峭の燭一つ足す

参道の蕎麦屋団子屋日脚伸ぶ

昼は昼夜は夜の声で木菟鳴けり

建国日硯海に水注ぎ足して

瀬戸内の沖の魚島菜の花忌

入江までゆく先駈けの春ならば

一碗の粥へと落す寒卵

飼はれゐて鳩にはなれぬ鷹一羽

# こつんこつんと

主宰作品

増成栗人

# 「鴻」の歳時記（春編）

抽出

佐久間敏高

春 春は曙キリマンジャロの香り立つ

赤峰ひろし

春 春の藻の水性絵の具溶くやうに

北村操

春の夜 悼句書く春夜に指を汚すまじ

田辺満穂

春の雲 田の神の遊行ふはりと春の雲

田部富仁子

朧 舟入りの舟の触れ合ふ朧かな

山崎正子

風光る リトルリーグの四番は少女風光る

小林良作

春の霜 春霜の野はひとときの万華鏡

良知悦郎

春の雷 春雷や4Bの芯濃くやはく

佐藤あさ子

山笑ふ 二礼二拍手山笑ふ島笑ふ

横井遥

春 田 刃のやうなひかりの中の春田かな

吉田鴻司

四月馬鹿 数独の枡目を埋めて四月馬鹿

美濃律子

花 筵 在らへて今日を傘寿の花筵

広瀬弘

鞆 鞆 ふらここを漕ぎ誰からも遠くゐる

三代川朋子

鞆 鞆 空井戸のありふらここの軋む音

井上つぐみ

春の風邪

陸奥一の宮春風邪の巫女ひとり

田中一光

春眠

春眠といふは仏に逢ふごとし

増成栗人

三鬼忌

三鬼忌の空へ空へと観覧車

伊藤真代

虚子忌

栗鼠跳んで跳んで高濱虚子の忌よ

緒方七星

啄木忌

磯洗ふ波透きとほる啄木忌

有江洋子

蝌蚪

棚田一枚おほきな蝌蚪の国となる

荒井一代

囀

さへづりに一番近き窓開ける

神野未友紀

囀

囀りの塊となる一樹かな

後藤久美子

白魚

しらうをの水にもどりて透きとほる

後藤兼志

蝻

百代の過客か蝻の道のあり

待場陶火

蝶

蝶一羽遮るものなき湖へ

岩崎俊

桜

人肌の温みにさくらしだれけり

吉田鴻司

桜

きらきらと川ひらひらと散る桜

榎尾麻衣

花

咲き満ちて花の震へのをさまらず

高木直哉

花

向かう柴又どこまでも花の雲

幡柏

花

闕伽桶の逆さに干され花の寺

守屋久江

花

天寿とはいくつと問うて花の下

水谷はや子

花

両界曼荼羅らんまんの花の中

森多歩



# 羽音集

増成栗人 選



山 桜

山ざくら風の言葉のやうに降り

森川淑子

落 花

始まりは風花かとも飛花落花

豊田みどり

落 花

生も死も書けば一文字花吹雪

吉清和代

花 筏

風の日の花筏とは万華鏡

高橋葉子

辛 夷

花嫁のやうな寡黙を花辛夷

谷口摩耶

辛 夷

白き蝶舞うて辛夷の花となる

田邑利宏

白 木 蓮

はくれんの晴ればれと咲く母の郷

林 未生

いぬふぐり

いぬふぐりびつしり馬頭観世音

西条弘子

風花や言葉とならぬ声いくつ

松戸 吉清和代

寒月光振り返り見て人居らず

若者と並ぶ写真の悴める

白鳥の眠れり月の漣に

寒牡丹僧の足音遠ざかる

成人式耳に三つのピアスあり

札幌 北城美佐

小さくなる父七度めの年男

櫛や隣りの家は大家族

拍子木に高なる胸の初芝居

習ひ事多き妻なり春シヨール

原点に戻つてみやう嫁が君

船橋 藤原明美

年新た糊を効かせし白衣着て

黄のにじむ光を弾き福寿草

きはやかな色はなけれど粥柱

ゆつくりといつもどほりの冬菜道

冬日得て梢先の芽のふくれ来る

仙台 立石まどか

草加煎餅割つて二人の日向ぼこ

針のなき卓上時計日の短

朝の雨白菜漬をさくさくと

向う三軒この年は雪搔かぬ年

鳥獣保護区築百年の土間の冷え 小林和子

法令で狩猟を禁止、鳥や動物が保護されている一帯が鳥獣保護区です。自然の豊かな山林や山里、また町中の庭苑や公園墓地、潟なども保護区とされます。そんな一角に、築百年もの民家があります。奥行をもつ土間は薄暗くしんと冷えきっています。ずっと昔から鳥や獣と共生し、時に捕獲をしながらもバランスを保って生活してきた人々にとつて、何とも敵めない鳥獣保護区ですが、保護なくして生態系を守る事が難しい時代になった重たい「冷え」です。

毛糸編む夜はひとりのものがたり 山田ゆきこ

棒編みか鈎編みの、手編みでマフラーかセーターを編んでいるのか。複雑な模様編みではなく単純なメリヤス編みなど、無心に指を動かしているひとりの夜です。今日一日のあれこれを思い、気付いたり印象に残った事々が通り、次第に過去へ過去へと、また先々へと、いつのまにか自分が主人公のものがたりを描いています。

自在に「ひとりのものがたり」を編み込みながら、静かに夜が更けてゆきます。

山幾重足元濡らすほどの露 渡辺とくゑ

山が幾重にもたたなわる遠景と、丈の短い草々が露を結んで足元を濡らす、という身に近いことの二句を一章に詠んでいます。露は大気中の水蒸気が物の表面に凝結した水滴のことですが、一方、涙にたとえられたり、わずかなこと、はかなく消えやすいことなどの象徴として使われる言葉でもあります。

足元を濡らすのが雨では詩になりません。露の、それも「濡らすほどの」が足元を美しく装うようです。

子には子のゐて縁側の日向ぼこ 安食哲朗

我が子にも子が居て三代健在であるという駘蕩とした日向ぼこです。それも縁側に座す一時は至福の安らぎでしょう。

当世、結婚を望まない若者も多く、また諦めていたり、諸々の事情から独身を通し、あるいは晩婚化のために子供が居なかつたり、と家系が絶えてしまう傾向にあるようです。今までの常識が通らない社会や環境の変化に何が幸せかの予測もつきません。子供もなく縁側もない家が一般化されてゆくのでしょうか。

ちよつとせうまで 第11回



「品川・旧東海道を行く④」 鈴木 崇

日本橋に行ってきた。当欄、東海道をシリーズで歩いてきたので、起点の場所に行っておこうと思ったのだ。ご存じの通り、日本橋の上には高速道路が架かっている。風情もへったくれもあつたもんじゃない。日本橋は、江戸時代から東海道をはじめとする五街道の起点であり、物流の大動脈であつた。現在もお日本橋川には、多くの橋や高速道路、線路が折り重なり、ドクンドクンと脈打つ交通の要所ある。

泉鏡花『日本橋』は、檜物町、大工町など旧町名が頻出する花街としての日本橋の物語。作中で印象的に描かれるのは、日本橋ではなく一石橋だ。芸妓たちと取り巻く人物の人間模様が唯一無二の文体で描か

「調査の帳面に、名を並べて、女房と名告って、一所に詣る西河岸の、お地藏様が縁結び、……これで出来なきや、日本は暗夜だわ。」

芸妓がお参りする西河岸延命地藏尊はピルの谷間にボツンとあつた。境内の絵馬には『日本橋』の登場人物・お千世が描かれている。小説が舞台化された際に、お千世を演じ出世役となつた花柳草太郎が、後年、地藏尊にお千世の凶額を奉納した。描いたのは小説『日本橋』の装幀を担当した小村雪岱。その絵をもとにした絵馬なのだ。

初空や出の姿して日本橋 泉鏡花  
ここまで四回にわたつて旧東海道を歩きを続けてきた。今まで何気なく歩いてきた通りに一里塚や宿場街の名残を見つけてるのは面白い体験だつた。

東海道についての資料を採る過程で出会つた短編に岡本かの子「東海道五十三次」がある。語り手の女性の夫が青年期から旧東海道歩きをライフワークとしており、夫婦で旧街道を旅する話だ。作中に生活をなげうつて東海道の上下りを繰り返す「東海道人種」(一)が登場する。その人物が次のように言



日本橋・お千世の絵馬

長いが引用する。

「この東海道というものは山や川や海がうまく配置され、それに宿々がいい工合な距離に在つて、景色からいっても旅の面白味からいっても減多に無い道筋だと思つたのですが、しかしそれより自分は五十三次が出来た慶長頃から、つまり二百七十年ばかりの間に幾百万人の通つた人間が、旅というもので嘗める寂しみや幾らかの気散じや、そういつたものが街道の土にも松並木にも宿々の家にも浸み込んでいるものがある。その味が自分たちのような、情味に脆い性質の人間を痺らせるのだからと思つますよ」

旧東海道歩きの魅力を余すところなく表現している言葉ではないだろうか。

# 茶庵閑話

虫丸



春になる  
となぜか  
自然の中  
へ出て行  
きたくな  
りますね

野っばら  
で食べる  
お弁当が  
美味しい  
んだ

不思議なんです  
が俳句を作り  
に出かけたとき  
には普段なら  
興味も引かない  
つまらない風景や  
平凡な日常の作業が  
新鮮で魅力的な  
ものに見えて  
くるんです

それはね  
俳句になる  
かどうかと  
ものを  
真剣に見て



その本質に到達して  
想像力を  
集中する  
それが  
意識の鮮度を  
深化させるんだ  
そのために  
なんてこと  
もない日常  
の風景の意味が  
変化するんだよ

ナルホドー!!



意識の鮮度の  
深化です♡

ナニカワルイモ  
食べてきたわね

スミマセン  
救急車を...